

多摩川で発見されたカンエン ンガヤツリ

浜 中 義 治

A New Record of *Cyperus exaltatus*
RETZ var. *iwasakii* T. Koyama
from Tamagawa River

Yoshiharu HAMANAKA

1985年10月22日、神奈川県植物調査会の植物調査の為、川崎市高津区宇奈根の多摩川畔で採集を行っていた。増水の時は水をかぶるような川床の礫地ではホソアオゲイトウが多数生育しており、ヌマガヤツリも散見されたが、その間で見馴れぬカヤツリグサ科の植物を発見した。高さ20cmほどで、ひげ根は多少赤味がかっており、匍匐枝や球芽は全くない。又付近ではアカバナも見つかり、共に採集して持帰った。

更に2日後の10月24日、同じ川崎市で前回の採集地より下流に当る中原区小杉多摩川畔で、再びこの種に出会った。今度は礫地ではなく、釣人が魚を釣っている小さな沼地の縁であった。ここではかなり大きな個体があり、生育状態が良く、高さは腰位まであり、1株から7~8本の茎が真直ぐに立ち、その上に散形の花序が傘をひろげたように見えた。これより更に下流溝で、サンカクイ等と混生している高さ1mほどの個体を数株観察した。

この両地で採集し標本を県立博物館の大場達之氏に同定していただきカンエンガヤツリであることが判明したが、更に確認のため、11月8日記憶をたよりに現地に出かけた。中原区小杉の溝に、少し実が散りかけていたが健在であり、更に溝の下流でヨシの間をかき分けて、高さ1m位に育った株を2個所で観察することが出来た。11月7日、東京都側の多摩川の二子玉川下流で、大場達之氏もこの種を発見されたとのことで、探せばまだ多くの個体が見つかるのではないかと思われる。

この種は水湿を好み水辺に多く生育しており、私が見た過去に見たカヤツリグサ属の中では最大なもので、高さは1mに達する。茎は少し光沢のある鈍三稜形で、切口は卵形になっている。特に目立つ点は花序の苞葉がよく発達していることで、6~7個の苞葉のうち4個ほどは特に長い葉状となり、60cmに達するものがある。花序も大型で、直径30cmほどの散形にひろがる。花枝は長短不同で7~8個は長さ10~20cmあり、その基部のものは短かくかたまって密集している。1個の小穂は平たい線形で、20花ほどが2列に並んでつき、黄緑色で、中央部は褐色を帯びている。鱗片はゆるく2つ折れの舟形となって果実をだき、背部は緑色両側は褐色となっている為、上記のように中央部が褐色に見えるのである。質は柔かく、カヤツリグサやコゴメガヤツリよりも手触りはソフトである。果実は稜形で小さく、花柱は果実の倍長で先は3裂する。

牧野植物図鑑では、カンエンとは本草学者岩崎灌園の名にちなむと書かれており、東京不忍池、埼玉、青森などの湿地に稀に産するとある。保育社原色植物図鑑下巻には、上記の他茨城の名がある。又1975年新版千葉県植物誌では、佐原、柏、松戸、成田の4ヶ所が産地として載っている。

緒方正資(1926)によれば、東京不忍池では大正の頃より年々消長があるが生育を続けていることが写真入りで解説されている。この種は朝鮮で多く植栽され、高さ3~4尺になった茎を用いて蓆を織ることに用いられたということで、又種子が小さいものである為、水鳥が実を運んだのではないかと種子散布にも言及している。とすれば多摩川畔のものも、水鳥による運搬も十分に考えられる。

神奈川植物目録(1933年)、神奈川県植物誌(1958)にも記録がなく、今回の発見が神奈川県では初めてであるとすれば、又新しい貴重な記録が加えられたことになるであろう。

文 献

緒方正資 1926 エジプトノパピルスヲ想定セシムル
カンエンガヤツリ、植物研究雑誌 3: 260-
264.

千葉県生物学会編 1975 新版千葉県植物誌 597.
(神奈川県植物誌調査会)



カンエンガヤツリ，川崎市中原区の多摩川畔にて